

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

水の向こうにあるもの

愛媛県 愛光中学校 一年 井上 愛理

目に見えない敵をかわすため、私はただひたすらに手を洗う。こうすることで、少しだけ心が平穏になる気がした。せっけんを泡立てる手の向こうには流しっぱなしの水。

分かっている、いや分かっているつもりだった、水は大切だということ。自分にとって大切なのか、いや世界中の人々にとって大切なのか、この水は。

ハツとして、私は勢いよく流れている水を止めた。この水は、みんなのものだ。

世界中に猛威をふるっている新型コロナウイルスには、手洗いが有効だということを何度も聞いた。衛生的な水でいつでも手を洗うことができない、これは当たり前ではないと知ったのは、最近のことだった。私の住む地域では平成六年に大洪水が起き、時間断水を行ったため、夏場に四〜五時間しか水が出なかったそうだ。一日のうち、蛇口から水が出る夕方の数時間以外は、お風呂やバケツなどにためた水が無駄遣いしないように少しずつ使っていたと聞いた。日本は地震や水害など、多くの災害が起こってきた。長期間の断水が続く状況は、想像を絶する苦労があっただろう。未知のウイルスにおびやかされている今、もしこのような状況になってしまったら、生活に支障が出ることはもちろん、思う存分手を洗うことはばかられ、きつと精神的にもつらい日々となるはずだ。蛇口から水が出る、それは当たり前前のことではないのだ。

地球規模で考えると、災害という理由だけではなく、日常的に水が使えない国や地域があることを知り、私はがく然とした。安全な水が手に入らない人は、世界で六億六千三百万人もいる。身近なところに水がなく、子どもたちが水をくむという重労働を強いられ、一日の大半の時間と労力をそのために消費し、教育を受ける機会もないということを知った。

また、水が使えないために手を洗う習慣自体がない国もたくさんあるそうだ。世界中で手洗いの重要性が叫ばれている今、もしこのような国や地域で感染症が流行してしまつたらどうなってしまうのだろう。水が使えない人々の生活や気持ちを考えると、胸が痛む。感染症を防ぐ手洗いという手だてもないままに、命の危険にさらされてしまうのか。

水の向こうにあるものは、命。

この水で感染症を防げる。この水で命が救われる。この水で世界は幸せになる。この水はみんなの水だ。ほとんど意識することなく水を無駄遣いしていたことを、私は申し訳なく思った。

自然は時に人間に試練を与える。雨が少なければ干ばつを、多ければ水害を引き起こし、容赦なく刃を振りかざす。自然をコントロールすることはできないながらも、自然と折り合い、共存していこうとする謙虚な姿勢が私たちに必要だ。

二十五年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）は、二十三十年までに、持続可能でより良い世界を目指す十七の国際目標となっている。そのうち目標六は「安全な水とトイレを世界中に」と掲げられており、すべての人々の水と衛生への利用可能性と持続可能な管理を確保することがゴールだ。水は限りある資源であると同時に、無限の可能性も秘めているのだ。多くの命を守るために、世界は大きく動き始めた。

今私にできることは、行動を起こすこと。そして、問題に向き合い、考え続けること。水を流しっぱなしにしないことや、募金をすることは、今すぐできることだ。また、水の問題について自分の事として考えてみることでできる。

世界中の人々が安心して衛生的な水を使うことができますように。そして、自然と共存しながらよりよい未来を迎えることができますように。